

<エッセイ>ビジョンを持った中心地

著者	ペトコーヴァ ゲルガナ
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	144-147
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006708

<エッセイ>ビジョンを持った中心地

著者	ペトコーヴァ ゲルガナ
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	144-147
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	http://doi.org/10.15055/00006708

ビジョンを持った中心地

ゲルガナ・ペトコーフ

ブルガリアの日本研究は一九六〇年末に外国の大学から帰国した最初の留学生によって生み出され、彼らは新しい学術分野を確立し、知的なコミュニティの核を築いた。東欧の国におけるこうした学術的な革新の必要性には政治的戦略、知的交流、文化相互のコミュニケーション、経済計画などいろいろな理由から説明をつけることができるだろう。しかし一つ確実なこととは、ブルガリアは何十年にもわたって日本に対して非常に良いイメージを抱き、日本文化への関心は五〇年間たえず上昇していったということだ。

日本研究が生まれる最初の数歩は語学的な学問分野が政治的な変化と経済的な乱流の迷宮から踏み出されたのだが、そのステップを振り返ることは、大学の学問（アカデミア）がどれだけ日々の興味の結果であるのか、あるいはそれが最初の波から何十年たつてようやく表面に表れるようなもっと深層の渦や流れなのかを考え直すよい道筋だろう。それは人文科学の未来について決して終わらぬ議論にも関わる。

ブルガリアの政治的な変化は一九八九年に起こった。一九九〇年、ソフィア大学は最初の日本語学科の最初の常設課程を開いた（その時は五年間の修士課程だったが、今は四年間の学士課程を採っている）。少数だが非常にやる気のある学生を集め、ゆっくりとしかし着実に学問分野が拓かれていった。それは国で最も名声が高く人気のある大学プログラムのひとつとなった。

ブルガリアの日本学確立の中心人物はツベタナ・クリステワで、当時は若く将来性の高い研究者だったが、今では国境を越えてよく知られた日本の古典文学の著名な専門家である。彼女は日文研を訪れた最初のブルガリア人だった。彼女の名前は今なお賞賛とともに綴られ、あらゆるブルガリアの日本学研究者の尊敬を受けている。彼女に続いて訪れたのはエミリア・ガデレワ、リュドミラ・ホロドヴィッチ、ボイカ・ツイゴヴァで、いずれも日本学発展に貢献した。二〇〇三年から二〇一〇年にかけて東アジア言語文化学科長をつとめたボイカ・ツイゴヴァは二度にわたって日文研の연구원となり、学士・修士課程の改善に努め、ブルガリアの日本学の競争力を高め、生気を与え揺るぎないものとした。最近では若い世代がバトンを引き継いでいる。

ブルガリアは文献学・言語学の強い学派の長い歴史を持っている。古くは九世紀のシリルとメトディオスの兄弟と二人の弟子たちによるキリル文字の発明と普及があり、弟子のなかには今日のキリル文字の版の発明者として知られるクリメント・オフリドスキがいる。新しくは二〇世紀のツベタン・トドロフとジュリア・クリステヴァ（二人はソフィア・聖クリメント・オフリドスキ大学卒業）の学術的貢献が知られている。ソフィア大学の言語学部は現在では三〇以上の外国語を非常に高い国際レベルで教えている。大半の卒業生は少なくとも三〇の言語のうちのひとつに関して、ネイティブ・スピーカーに近い能力を身に付け、国際的な環境でキャリアを積んでいる。

しかし私たちは乱流渦巻き、頭を悩ませる時代を生きている。一体この語学の伝統は懐疑的な人文科学者によっていくどもいくども攻撃され、どうやって生き延びていけるのだろうか。私たちの学生たちは今『伊勢物語』をオリジナルの中世日本語からブルガリア語に翻訳して

いる。そして多面的で多層的で多義的で非常に生き生きした言葉に驚いている。それは人類普遍の本性に合った言葉だという印象を持っている。学生たちはナルト、デスノート、ワンピース、ピカチュウとともに育ったマンガ・アニメ・ファンだが、同時に日本学の勉強は「より良い人」になると信じている。こうした勉強は知的な挑戦や楽しみをもたらすと最近のアンケートで答えている。日本に「恋して」いるのだが、決して収入の良い将来のキャリアが待っているからではなく（ブルガリアではめったにないことだが）、未来のためのビジョンを約束してくれるからなのだ。彼らは大胆にも訊いてくる。「センセイ、いつになったら源氏や平家を翻訳するのでしょうか」。彼らは決してマンガ版の翻訳を述べているのではない。ブルガリアの読者のための贈り物としてマンガも訳すのをためらってはいないが。

つまり……文化と語学の防波堤を必要としている。ビジョンを持った中心を。

私は日文研の活動については二〇〇二年からのことしか知らない。それは博士学生の時期、論文審査員だったクロプフェンシュタイン先生を訪問したときだった。そのときにたとえ短期間でもこのような研究所に埋没できるよう最大限の努力を払おうと決意した。この決意を実現するのに一〇年以上もかかってしまったし、何がそれほど魅力的だったのかを理解するのにはとんど一五年もかかってしまった。事実、日文研は三〇年間の存在を通して、つねに前線に立っているというより前線そのものだった。それは最近の共同研究の課題をざっと見渡すだけでわかるだろう。「投企する古典性―視覚／大衆／現代」、「多文化間交渉における「あいだ」の研究」、「311以後のディスコース／『日本文化』」ほか多数。政治や社会の変化に敏感で、国のレベルを保ちながら同時に国際性を志向している。業績に貢献すると同時にその触媒として機能している。

日文研は理論を学び共有し発見し拡散し、協力し再考し疑問視し発見する場所であり、伝統を守り創造する場所である。人文科学の未来にとって真に先を見る場所である。

(聖クリメント・オフリドスキ大学日本文学科)

原文：英語

翻訳：細川周平 (国際日本文化研究センター教授)